これからの猪猟〈19回〉

田宮　治

不要な激戦

踏み込めば身動きができない竹藪で、やはり恐ろしい戦いの真っ最中である。猪も犬たちもワンワン、バリバリ、グォーッグッグーッと、凄い音がするだけで姿は全く見えない。

犬たちは既に私の接近に気付いているようで、猪に対する攻め鳴き声が微妙に変わった。まごまごしているといつもの噛み止めになってしまう。私は大声で「やあっ！　ホイホイホイ」と大声で怒鳴った。これは言わずと知れた、おやじ直伝のウサギやクマに対する巻き狩りの鳴り声である。

いつもやっている年季の入った勢子の武器だから、二回目を鳴り終わると猪は狙いどおり小沢を飛び下りている。犬たちは当然、逃がしてなるものかと一斉に食い下がり、谷落としとなって山裾に向かっている。

「よしよし、これでよい」と、急いで猪道を走って大杉の根元まで戻り、そこからころげ落ちるように小峰伝いに飛び下り、犬たちを追った。

犬たちの追い鳴きが予想どおりの止め鳴きになったので、GPSで確認してみると、そこは小沢の下に広がる小さな三角形に並び立つ大杉林である。

願ってもない場所で止め切ってくれたが、その下は田荒らしで、向かいの大山続きまで一五〇㍍くらいしかない。この止め現場で撃ち止めないと大変なことになる。

私は小峰伝いに必死で走り、左峰下の小沢を団子になって食い下がり、谷落としをかける犬たちを追って来たが、小沢口に広がる大杉林で犬たちが猪を止めているので、大声を張り上げての寄り付きもここまでである。ここからはゆっくり静かに、慎重な寄り付きが要求される。

急斜面の小峰筋は、この辺りからほとんど平坦な台地で、小峰全体が篠竹で覆われている。この先五〇㍍くらいで急な崖になり、その下が田荒らしになっている。

二年前にこの犬たちと千代号を加えた四頭で、今回とは反対側の山下の大杉林から攻め登って、この篠竹の台地で一四五㌔の大猪と大激戦の末、あのナラの木の根元で止め切り、一発で命中するが倒れず、さらにもう一発撃ち込んでやっと勝利した大一番があった。今あの時の記憶が蘇り、いやが上にも戦闘ムードが盛り上がってくる。

私はGPSで現在の位置を確認し、犬たちの生の声を頼りに猪止め現場の位置を頭にたたき込んだ。

「よし、待ってろよ」と心で念じて、蔓や木に掴まりながら一歩また一歩と下り、ゆっくりと慎重に大杉林のすぐ上まで寄り付いた。

篠竹藪からはバリバリと音がしており、私の下りて来る姿は丸見えになっている。そんな状況なので、細心の注意を払いながら猪止め現場まで寄り付いた。ところが、不思議なことに、猪はこの先の大杉の根元で弱点の尻を守りながら犬たちと戦っているようで、姿は全く見えない。犬たちも落ち着いた止め鳴きで、大杉の根元に向かって攻め続けている。あと二〇㍍くらいは寄り付きたいところだ。

そろりと足を踏み出した途端、

右手で持った藤蔓が切れ、千葉特有の粘土質の山肌をずるずると三メートルくらい滑り落ちた。「しまった」と思う間もなく、猪は下に飛び出し、犬たちの鳴き声はあっという間にすぐ下の田荒らしを通って小川の中をどんどん下流に突き進んでいる。

私はGPSを取り出して犬たちの後を追った。そして、猪止め現場に駆け寄ると、そこは根回りが二メートルくらいの大杉の根元で、小沢の水流に削られて蛸足状になっている。

猪止め現場付近の小川である。よく道として使っているが、この中でもし猪が突いて出て来たら、犬たちは必ず猪の両側に噛み付いたままなので、撃つのも至難の技となる

その中で猪が陣取って反撃している。周り三メートルほどの青木や雑草はへし折られ、かきむしられており、この戦いの凄さを物語っている。あと三〇メートルくらい先だが、青木と雑草で姿が見えない。ここで絶対に撃ち獲らなければならなかったのに、またしても俺の失敗で追っ払ってしまった。

やるせない気持ちでGPSを取り出すと、犬たちはまだまだ元気なようで、「ジジ、何をしている。大丈夫だ。さあ早く来いよ」と、ギャンギャンと追っている。その追い鳴きも小川伝いを下流へと……。

それにしても、恐ろしく速い猪だ。こうなったら犬たちを信じて、猪を攻めまくって撃ち獲るだけだ。そう自ら檄を飛ばし、必死で犬たちの後を追って問題の田荒らしまで出た。

そこには、この時期としては珍しいどん仔（仔猪）の足跡や、大猪（親猪）の掘り跡と数本の猪道がある。その他はぬかるみの湿地帯になっている。ここに狩り入る猟人たちは安全な所を選んで通っている。

だが、今は大回りする余裕などない。一番近い湿地帯を横切って小川の岸までたどり着いた。そこから犬たちが猪を追い下った小川の中を急いで走り、次の猪止め現場に何としても追い付かなければならない。

ぬかるみの湿地帯に浮き島のように茅や雑草が生い茂る。その上を飛び越え、飛び石代わりに踏みつけて小川の土手の安全な所まで何とか行けたが、その先に肝心な雑草の浮き島がない。

足場が浮き島と悪い上、狩猟用のスパイク付きゴム長靴では三メートル以上は飛び越えられない。もし、このぬかるみにはまれば大変なことになる。だからといって戻るわけにもいかない。

一瞬立ち止まって考えるが、「一気に走り飛べば大丈夫だ。とにかく急がなければ」と踏み出して岸に飛び上がろうとした瞬間、何と両足もろともぬかってしまい抜くことができない。もがけばもがくほど、どんどん深くめり込んでいく。

とっさに両手をついて四つん這いになり、これ以上深くめり込まないようにしたが、左手に持っていた銃ごとバッタリ前に両手を着いた。何とか脱出しようと周りを見ても、掴めるような木の枝や蔓草はない。思わず左手の銃をそのまま横にして泥中に、それを利用（力にして）して四つん這いで安全な土手に一気に這い上がった。やれやれ、とんでもない失態をしてしまった。

土手に腰を下ろし、ゴム長靴を点検する。泥だらけだが、この長靴には雪やごみの侵入を防ぐ布地の締め付けがあり、それを強く締め付けていたので、幸い水の浸入は少なく、厚手の靴下は大丈夫だった。

次は銃の点検である。首に巻いているタオルで泥だらけになった銃を丁寧に拭き取り、銃口は水洗いした。これで何とか緊急の対応はできた。

今日はいつも背負っているリックがない。リックには着替えや手袋、タオル二枚、水ボトル二本、そして電器類から食料、猪の引き出し用のロープまで必要品は一通り入っている。

だが、今日は勝手知ったる猟場であるので長くても一、二時間が勝負だと思っていた。そのため、リックは持たず、狩猟ベストの背袋に、おにぎりと水ボトル、犬用のコッペパン三個、ミカン三個、栄養ドリンク三本、替えの電池、懐中電灯など、猪との戦いを最優先にした軽装である。当然、腰には犬たち三頭分の引き綱とナイフと鉈はある。

両方の腕の肘までと膝上までがずぶ濡れで泥まみれだったので、タオルで身体に付いた泥を落とし、どうにか戦える態勢を取り戻した。

気を取り直してGPSを確認すると「?マーク」である。微かに犬たちの止め（鳴き）声が無線から入ってくる。もう三十分もお前たちを放っておいたというのに何という凄さだ。無線から微かな水音が入ってくる。

私はこの小川のY字形に分かれている小峰の裏側辺りだと見当をつけ、小川の中をじゃぶじゃぶと走り出した。このY字の小川は、山裾が篠竹や湿地帯で通れないので、グループ猟ならよく使う道として知られている。

小川の浅瀬を夢中で走りながら、カツ号、ブイ号、武蔵号は俺が駆けつけるのを信じて命懸けで噛み止めている。その姿を思い浮べると、「あと少しだ。我慢して頑張っていてくれよ」と、祈らずにいられなかった。

私のわがままで犬たちがあんなに見事に止めたにもかかわらず、猪の引き出しを楽にしたいがために、不要な激戦を一時間半もしいたげたのである。

右側に篠竹の密生している小峰下の小川を、Y字の分岐点になる二〇メートル手前まで来ると、突然、犬たちの生声がとび込んできた。その噛み止め声は猪にかぶり付いたままで鳴くガオッガッォー、ワォッという低いうめき声と、ワンワンの連続鳴きである。

どこだ？　山の峰や平からではない。立ち止まってGPSで確認すると、Y字の分岐点をUターンするように右側の小川をほんの少し上流に登った所だ。おかしいなあ？　左の小川の辺りには滝があって犬たちは登れないはずだが……。でも、犬たちの声はすぐ上流から聞こえる。

ひょっとしたら、あの滝の下かもしれない。あそこだったら、必ず猪はこの小川を突いて出て来るはずだ。小川の両側は篠竹が密生して、二、三メートルの水が流れて登れない崖だ。いつ突いて出て来てもその場で倒す態勢で、銃を前に突き出し、一歩また一歩と前に進み、滝の見える所まで来た。

ところが、猪も犬たちの姿も見えない。すると、左側の篠竹の密生した崖上辺りで、犬たちが凄い鳴き声で猪にかぶり付いている。崖上の篠竹藪だとすると、また小川の分岐点まで戻って、その先の田荒らしから回り込む以外にない。

さて、どうしたものか？と考えていると、突然、カツ号が滝の左側からひょっこり顔を出し、小川の中を全身ずぶ濡れになりながら私の所に来た。

「お前たち、そこで頑張っていたのか」と頭を撫でてやろうとすると、「ジジ、早く来いよ」というように、急転換してさっき出て来た所を曲がって行き、見えなくなった。

猪はあそこの奥だな。この仔たちの激闘を前に、主人の俺が後れをとってなるものか。ここからが猪猟の真骨頂を発揮する出番がきたと、闘将の鬼になって銃を突き出し、カツ号の後を追った。

（つづく）